

一橋大学大学院言語社会研究科
国際研究シンポジウム

生表象の動態構造

虚構と現実のあいだ

作家はエクリチュールにいかなる仕掛けをほどこすのか？

「Hitotsubashi International Fellow Program」共催／「一橋大学個人研究支援経費」助成企画

《特別講演》

アンヌ・バイヤール=坂井

フランス国立東洋言語文化大学

(INALCO : Institut National des Langues et Civilisations Orientales)

日本語文化学部教授・日本研究センター所長

「一人称のフィクションとノンフィクション——谷崎潤一郎の場合」

谷崎潤一郎が好んで一人称を用い、多くの作品の語りを一人称の語り手に託していたことは、谷崎読者にとって明らかである。だがその語り的手法を通して谷崎は何を目指していたのであろうか。一人称は虚構性と「自伝性」の両極の間に位置する以上、その両極への方向性を含んでいる。今回は谷崎作品の中から幾つかの一人称フィクションとノンフィクションを取り上げ、その方向性がどのように文章世界の構築に貢献しているか検討してみたい。**主要著作**：「暴露される一人称と小説の可能性」（『文学』、2008年9-10月号、p.104-114）、『谷崎潤一郎——境界を超えて』（千葉俊二氏と共編、笠間書院、2009）、ほか多数。

《報告》

森本淳生（一橋大学大学院言語社会研究科・准教授）

「批評言語と私-小説-論——ポール・ヴァレリーから小林秀雄へ」

中野知律（一橋大学大学院社会学研究科・教授）

「マルセル・ブルーストの奸策——〈書けない主人公〉の誕生」

コメンテーター 坂井洋史（一橋大学大学院言語社会研究科・教授）

2010年1月23日（土） 午後1時30分より

一橋大学 東キャンパス 国際研究館4階 大教室（JR中央線「国立」下車）

入場無料（事前予約不要）／使用言語：日本語

*1月18日（月）4時半からアンヌ・バイヤール=坂井教授による研究セミナーも開催されます。

連絡先：森本淳生（atsuo.morimoto(at)srv.cc.hit-u.ac.jp / 042-580-9036）